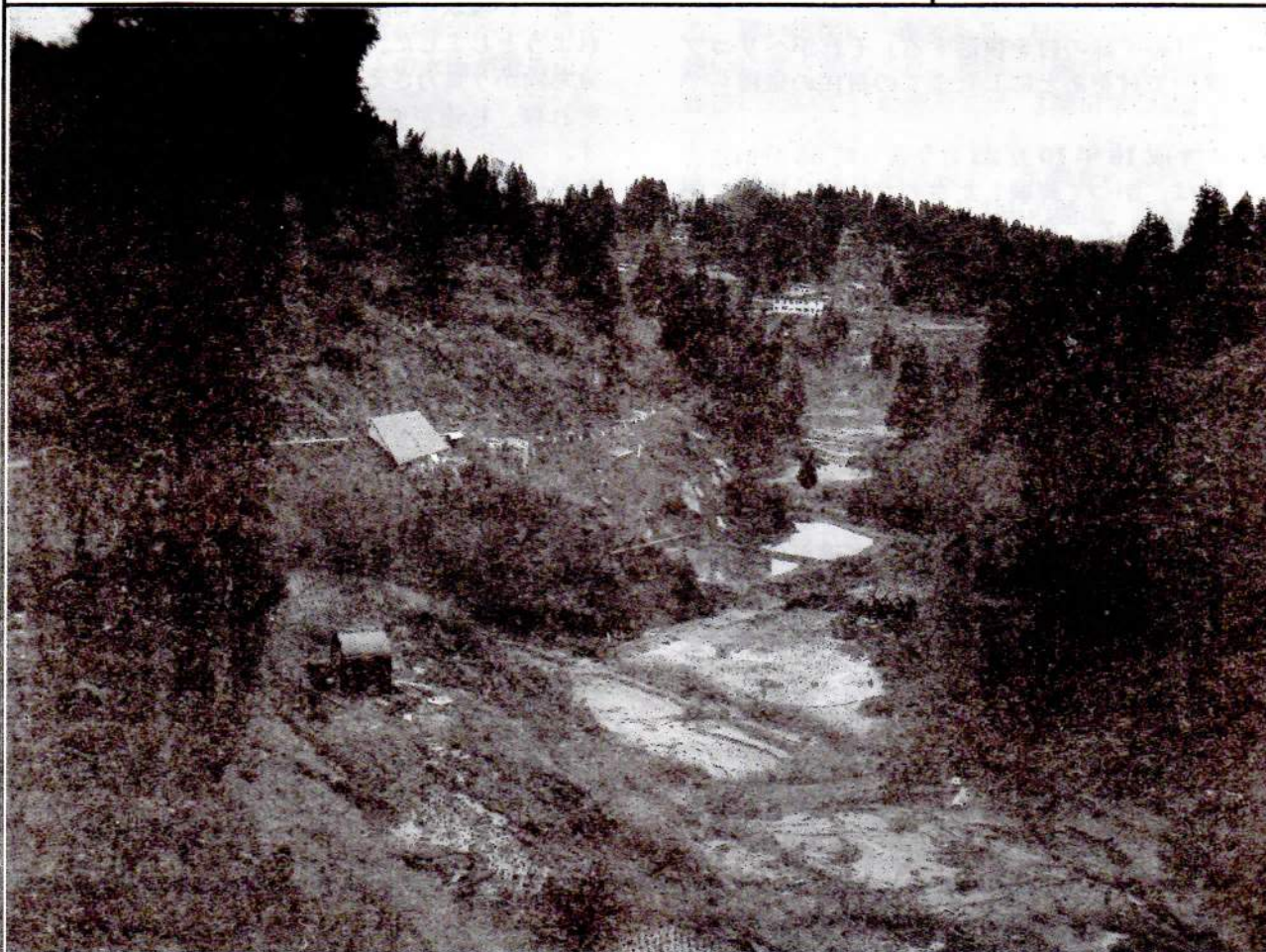


# 棚田学会通信

第15号 2005年2月20日  
発行/棚田学会  
〒184-8577  
東京都小金井市本町6-5-3  
(ふるさときゃらばん内)  
TEL:042-381-6721  
FAX:042-383-8614



## 目次

**表紙の写真** 新潟県山古志村の棚田 ..... 1

### 巻頭言

あの棚田を、歴史や文化の復興を ..... 新潟県山古志村長・長島忠美...2

### 各地の情報

「よみがえれ！新潟中越の棚田—復興への祈り—」

..... 県立新潟南高校教諭・新潟大学大学院生(博士課程)・竹田和夫...2

兵庫県豊岡市周辺の棚田—台風の影響— ..... 兵庫県豊岡農林振興事務所・矢崎雅則...4

“田毎の月”映すピオトープづくり ..... 千曲市経済部農林課農村整備係長・中曾根昌彦...5

### 日本の棚田百選の紹介

故郷(ふるさと)西有田、岳(だけ)の棚田について ..... 岳信太郎棚田会 事務局長・池田勝幸...6

### 会員通信

里山文化の中の棚田 ..... 栃木県茂木町農林課長・田村幸夫...6

現地見学会「北関東の棚田」に参加して ..... 山形県大蔵村・矢口 智...7

**棚田学会事務局ニュース** ..... 8

## [巻頭言]

### あの棚田を 歴史や文化の復興を

新潟県山古志村長 長島忠美

「必ず緑の村を復活する」それがヘリコプターで村をあとにした全ての村民の気持ちでした。

平成16年10月23日午後5時56分山古志村は、かつて経験した事のない強い地震に襲われました。たったそれだけの事のために私達は、大切に守り続けて来た全てのものを失うに至り、絶えず襲う余震の中で、全村民避難の道を選ばざるを得ませんでした。

2ヶ月近くの避難所生活を経て、今は全ての村民が仮設住宅で生活をしています。私はこの間、全国の皆様から寄せられた温かい励ましやご支援に心から感謝をしています。村民もこの厳しい環境の中ですが、感謝の心を忘れないでいてくれました。私達が山里で生活を営む中で一番大切にしてきた、支え合う心を忘れないで、山古志村を愛し続けていてくれました。私は全国の皆さんから頂いたあたたかいご支援のたまものと深く感謝の心を抱いています。

地震の次の朝、夜が明けた時私達はあまりにも変わり果てたふるさとの景色を目にしました。山間豪雪の他、厳しい環境の中、心を

ひとつに村民が支え合って守ってきたもの、親が子へ、子が孫へ大切に大切に伝えて来た私達の生活の全てであった棚田が、姿を変えてしまったのです。山が動き、川が動きました。

悲しい現状を前に私達は絶望の淵に立たされようとしていました。私達の想像を絶する災害は立ち向かう気力さえ失ってしまいそうでした。それ程、私達が失ったものは大きかったです。しかし、私達は支え合って村を愛する心を頼りに全国の皆さんから励まして頂き、今必ず山古志に帰ろう、帰ってあの地を復興しようと誓い合っています。

自然は大きな治る力を持っていると思います。今は悲しい土砂でも必ず種が落ち緑をなし、花を咲かせると思います。

私達は今、自分達であの棚田を、あの歴史や文化を取り戻そうとしています。再び日本中の皆さんから、日本の心のふる里として愛して頂ける山古志を復興します。

必ず、緑豊かな山古志を復興し、自然と共生しながらゆっくりでもいいから、助け合って生活していきます。その事が全国の皆さんに対する一番の恩返しだと信じて頑張ります。

棚田のふる里山古志をどうぞよろしくお願いします。

皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げ、感謝の気持ちにかえさせて頂きます。

(1月15日記)

## [各地の情報]

### よみがえれ！新潟中越の棚田

～復旧への祈り～

県立新潟南高校教諭・

新潟大学大学院生(博士課程) 竹田 和夫

#### 1. 地震発生と棚田の被害

10月23日の夕方、新潟県を席卷した地震の長く、際限のない余震を自宅で感じながら、私の脳裏には平成7年4月に起こった日本海北部地震の記憶がよみがえった。このときは現在の新発田市天王に位置する豪壮な県指定文化財市島家住宅が倒壊し同家の広大な植物園も被害を受けた。当時県教育委員会に勤務していた私は、現場に急行し、警察・消防・役場と連携し、関係者を励まし、当面の措置や本格復旧に向けての作業をおこなった。いま思い出すと、被害は甚大であったが、限定されたエリアにおける震災であった。しかし、阪神・淡路大震災を除けば、他県でも例のない文化遺産の地震被害であった。完全復旧するまでには2年間か

かったのである。この体験が flashback し、今回の地震の余震が一段落したのち「また新潟の文化遺産がダメージを受ける。」という、とてつもなく大きな不安が頭をよぎった。しかし被害は私の予想をはるかにこえていた。有形・無形の文化遺産もさることながら、近年、文化的景観として全国から注目を集めていた棚田、具体的には、山古志村や小千谷を核とした北魚沼、十日町市を核とした中魚沼の中山間地のそれが崩落などの大きな被害を受けたのである。棚田が織りなす美しい風景は、いまや大地が裂け、水と土砂に埋もれている。

地震直後から生々しい映像や写真で全国に公にされ目にした県外の方も多と思う。例えば、11月2日(金)付け『新潟日報』では第1面に小千谷市西吉谷の棚田を縫って走る農道が地盤もろとも崩落した写真を掲載している。そして同27面には、1面でふれた西吉谷の被害(棚田が跡形もなく崩落しナイフで切り取ったような山の斜面がむきだしになり、直径3メートル以上陥没した田んぼもある)や十日町市下条地区の棚田が大小の亀裂があちこちに走

る写真を掲載している。7年前にはほ場整備を終えた下条では、田んぼの中に亀裂が走り、あぜが田と同じ高さで陥没したという。さらに、『新潟日報』同月7日付け記事では栃尾市半蔵金地区では、崩れた山が棚田を流した様子を伝えている。さらに、同月14日付け『読売新聞』では山古志村の棚田が半分はやられたとし、土砂崩れダムの水面が迫る山古志村種芋原の棚田の写真が掲載されている。いずれにしてもこれらは被害の部分報道にしかすぎず、避難所への対応、ライフラインの復旧が急務である現在、中越全体の棚田の崩落・亀裂などの詳細な被害調査はまだ進んではない。

## 2. 山古志の棚田と復旧への祈り

実は筆者はかつて『棚田学会通信』3号で、「棚田の保全とカモシカの保全」を書いたことがある。いまだから言うが、ここで取り上げた土地は実は十日町市二ッ屋集落なのであった。ここには谷地田型の棚田が多数みられ、田植えのぐるぐる植えが習俗的には注目されていた土地である。しかし、地震によりこの集落への道も途絶してしまったという。

山古志の棚田を初めて見たのは、いまから19年前である。その頃は、まだ棚田景観については、一般的には、顧みられることはなかった。唯一、宮本常一率いる日本観光文化研究所が調査・刊行した『あるくみるきく』57号(1971年)では後述する養鯉池と棚田のカラーグラビアを核に村人の life cycle を追った貴重な聞き書きとなっている。その後新潟大学の教官が中心となって編集した『山古志村史・通史編』では、「棚田をつくる」という章が組まれている。棚田を有する自治体は県内に多数あるが、通史の章題に位置づけた例は他には知らない。また近年、酒井英次さんという新潟の画家の作品展が県内で開催されたが、テーマが「民俗の原風景を描くー棚田」であった。そして展示には「五月の頃」、「耕」、「棚田の春」という山古志村を題材にしたものが掲げられていた。頸城郡や魚沼郡のそれに比して暖かみとさわやかさを感じさせるものであった。また、最近の出版物の動きに目を転ずると、『旅・写真』35号「美田を巡る一天と水の恵みを撮る」(2004年8月20日、株式会社ニュース出版)では、山古志村の棚田の写真が掲載されている。その他、山古志では純米吟醸の「山古志」の酒造好適米「一本杓」が棚田米を使用していることで売り出していたところである。このように山古志の棚田は諸方面から俄然注目を集めつつあったところであった。

私が山古志村の長島忠美村長とお会いしたのは棚田学会の懇親会場であった。アルコールも入ったせいか、互いに棚田に寄せる熱い想いを語り合ったような気がする。その後ろで故石井進会長がにこにこしながら見守ってくださっていたことは鮮明に覚えている。思い出深い一夜である。村長の語るその想いに突き動かされ、私は、「棚田の文化的価値について」を書き上げ、『棚田学会誌』第3号に投稿することができた。文化庁が主体となった文化的景観の二次調査における水田景観リストにも「山古志の棚田」があげられて評価されているが、私は多面的な文化的価値を整理するにあたり、狭義の水田景観のみならず、山古志の棚田と野池の錦鯉、さらに鬮牛が同居する複合的な風景、そして住民の熱いまなざしが常に頭を離れなかった。山古志村では、棚田に連なる水を張った野池に多数の錦鯉が飼育されているのである。山水や湧水を利用した斜面の溜め池で夏でも冷水を維持でき、鯉の変態や色づきにより結果を生じている。山の棚田は養鯉池として利用され、野池と呼んできたのである。野池と連なる山古志の棚田もいまや崩落著しい。そして、全村民の避難という苦境にありながら長島村長らの村民の熱い想いは変わらない。生活基盤の整備とともに棚田・錦鯉・鬮牛の復興もあわせて、村再生への決意にあげているその姿勢には頭が下がる。その結果、関係者の心を動かし、村からの鬮牛や錦鯉の避難空輸という前代未聞の救出劇が実現した。心より早期の村の再生を祈念したい。

村民生活全般の確保と同様に棚田等の復旧は長丁場の作業になることは必定である。かつて宮本常一は村で「農村の将来はどうなるか」という講演を行い、村人に大きな刺激を与えたという。いまあらためて県外の会員から方策を提示いただき、新潟において、棚田の復旧についての気運を醸成させ、サポートしてゆきたい。筆者は新潟大学の非常勤講師も委嘱されているが、とりあえず若い学生たちに棚田の価値と現況を訴えることから始めている。

山古志村は今雪に覆われている



## 棚田を襲った台風 23 号

兵庫県豊岡農林振興事務所 矢崎 雅則

今回ばかりはホンマに参った、台風 23 号。平成 16 年 10 月 20 日、関西に上陸。その日は昼前から激しい雨が降り続いていた。「今度の台風は違うぞ」と、18 時で仕事を終え帰宅しようとしたが、職場の周りは既に数十 cm 冠水。同僚の車に同乗し、道を選びながら何とか家までたどり着いた。

翌朝、クラクションの音で目が覚めた。外に出ると、あたり一面茶色の海。僕の車は泥水にドブクリ浸かっていた。自宅の電気・水道は 22 日深夜まで止まった。

22 日朝、市街地の水が引き出勤したが、職場は停電・断水状態。かろうじて活きている電話を使い、但馬地域の農業被害の聞き取り作業を始めた。

被害調査はなかなか進まなかった。道路が至るところで寸断され、町役場に電話しても担当者とは連絡が取れない。現地調査に行っても、泥が厚く堆積して近づけない場所もあった。但馬全域が被災地だった。

数日後、台風による農業被害がおおよそ明らかになったが、それは、私たちの想像を遙かに超えるものだった。農地、農道、林道の崩壊は数千箇所に及び、家や機械が流されたり土砂崩れで埋まったりした農家も多かった。浸水した畑の野菜は全滅。泥や土砂が厚く堆積した。稲刈りは済んでいたため水稻の被害はなかったが、ライスセンターや農協施設が水没し 1,200 t の米が廃棄処分となった。畜産では、牛・豚 200 頭以上、鶏 10 万羽以上が流出・水死した。

台風による被害は但馬全域に及んだが、とりわけ被害が大きかったのは中山間地域の急傾斜地にある、農地の大部分が棚田というような集落だった。

今年 1 月上旬、僕は上司に同行し農地被害の大きい集落を訪れ、農地の被災状況などについて農会長の話を聞いた。農会長の自宅の離れは土砂崩れで全壊し取り壊わされていた。

その集落は、山林からの土石流によって多くの棚田が土砂や風倒木で埋まり畦畔が崩壊するなど、集落の農地全体が大きな被害を受けていた。

特に、土砂で埋まったり崩壊した水路の被害は深刻で、復旧には多大な時間と労力がかかるため、今年の稲の作付けは非常に難しいということだった。

また、山林には強風でなぎ倒された風倒木が非常に多くあったが、急傾斜地であるうえ、木が幾重にも折り重なっているため、住民には手がつけられない状態であった。雨が降れば、それらの風倒木が流れ下って家屋を押しつぶす危険性も大きい。農会長は、住民は大きな不安を抱えているので、出来るだけ早く撤去して欲しいと話した。

国の事業には、自然災害で被災した農地や水路などの復旧を支援する事業があるが、それらは「原形復旧」が基本であり、壊れた物と同じ物を作るというものだ。以前より強固な物、使い勝手の良い物を作ろうとすれば、余分にかかる費用は自治体や住民の負担となってしまう。県でも、無利子の融資や野菜の補償事業など、被災農家・集落を支援する様々な施策を打ち出しているが、生活基盤・生産基盤を失った中山間地域の高齢者農家が、以前と同じ状態まで農地を回復させ耕作意欲を取り戻すのは難しいのではないだろうか。近年は、農家の高齢化や農作物の競争激化、農地の耕作放棄などが進み農家の経営体力が弱まっている。そのような農家の実状や地域の自然・社会環境に合わせて、復旧事業の補助率を上げたり、環境や景観に配慮した工事を行うなど、農家支援策を柔軟に展開する必要がある。

また、森林の保水能力を高めることも重要だ。今回の台風で土砂崩れを起こした山林の多くはスギやヒノキの植林地だった。そのような植林地では、林業の衰退や林業従事者の高齢化などが原因で、間伐や枝打ちなどの手入れが十分に行われていなかった。今後は、森林が本来の環境保全機能を発揮できるように、間伐等の手入れを十分に行って木を充実させたり、急傾斜地には保水能力が高く根張りのよい広葉樹を植えたりするなどの対策が必要だ。

台風 23 号の襲来直後、中越地震が起きた。この地震でも中山間地域の多くの農家が被害を受けた。中越地域は、棚田が多く畜産が盛んだそうだ。但馬とよく似ているだけにとっても心が痛む。今年の稲作に間に合うよう、一刻も早い復興を願って止まない。そして、山古志村を訪れようと思う。但馬と同じく、元気に復興した棚田を見に。

## “田毎の月”映すビオトープづくり (田園自然環境保全整備事業の取り組み)

千曲市経済部農林課農村整備係長  
中曽根 昌彦

10月の台風23号は、ここ数年災害の無かった千曲市において多大な災害をもたらし、市内全域における農地・農業用施設の被災は105箇所に及びました。特に、姨捨棚田のある市西部地区の降雨は1日で149mmにも達し激しいものでしたが、姨捨の棚田地帯における被災は僅か限られた箇所のみでした。このことは、中山間地における棚田の保全貯留機能が十分発揮されたことによるものではないでしょうか。年4回にも及ぶ畦の草刈りや毎日の水の見回りなど、水漏れや畦抜けがないよう農家の方々が棚田の隅々まで目を配り営農されていることが、農地を守り、すばらしい農村風景を造っているのだと思います。

そんな姨捨棚田の多様な生態系や美しい景観・多面的機能の保全再生を目的として現在、「田園自然環境保全整備事業」に取り組んでいます。当事業は平成16年度からの新規事業であり、千曲市では3年間で約1haを整備するものです。計画地は名勝「姨捨(田毎の月)」指定地域に囲まれるように隣接し、長楽寺にも近く姨捨の玄関口にあたりますが、竹藪や雑木、ツル性植物に覆われ荒廃農地化しており、棚田全体の景観や機能が損なわれている状況です。ここに棚田の地形を利用した姨捨棚田ビオトープ(仮称)づくりをスタートしました。

まず、名勝「姨捨(田毎の月)」保存管理計画策定に携わり、姨捨棚田を熟知しておられる東京農業大学の麻生恵教授にご指導を仰いだところ、ビオトープ整備は建設工事の終了時点が完成ではなく、むしろその後の継続的な管理こそが重要となり、行政主導では馴染みにくいことから市民グループを発足させ計画段階から参画させていくことが肝要である等、ビオトープ整備の考え方や留意点をご指導いただきました。広く市民の参画を求めワークショップ方式により進めることとし、市報で「ビオトープ市民サポーター」を募集したところ、17名の応募があり、地元姨捨区の関係者も巻き込み総勢34名の市民グループが誕生しました。

平成16年8月22日に第1回ワークショップを開催しました。午前中、麻生教授よりビオトープのイメージづくりとワークショップの意義を学び、その後グループ分けをして

現地調査を行いました。現地ではあまりの荒廃地化にビックリするとともに、現状の問題点や何ができるのかを観察しました。午後はグループごと、現地調査をもとに感じた点について意見交換し、白図への落とし込みと土地利用のゾーニングを行いました。サポーター同士初めて言葉を交わすのですが、各グループとも大変盛り上がり、消化できるか心配していた割当時間もあっというまに終了時刻になっていました。これは、幅広い年齢の各方面に知識、興味を持つ多彩な人達が集り、うまく融合できたからではないかと思われれます。

各グループのプラン発表では、皆さんドキドキしながらも、アイデア・意見をひとつひとつ一生懸命説明しました。たくさん出たアイデアの中で面白いものとしては、月が映りこむよう棚田を利用したビオトープ池を配置し、ここに来れば姨捨の「田毎の月」が四季を通じて見ることができ、夜も楽しめるビオトープにしようというものです。これには皆さん大賛成でした。

このようなワークショップを9月、10月に開催し、計画平面図を全員の合意のもと、まとめることができました。一番の心配であった今後の維持管理体制についての話し合いでは、全員の方からこのまま継続して参画していくとの心強い意思表示をいただき、やっと一息つくことができた次第です。

ビオトープへ移植する生き物、植物の具体的な選定はさらにワークショップの中で検討していくこととなりますが、サポーターの皆さんと楽しみながら知恵と汗を出し合い姨捨棚田ビオトープ(仮称)を創っていきたいと考えております。

### ▽熱心に意見交換をする参加者達



## 故郷（ふるさと）西有田、 岳の棚田について

岳信太郎棚田会 事務局長 池田勝幸

佐賀県西部の西有田は、東にみどり豊かな黒髪山と、西には紅葉できれいな国見山と、中央に流れる有田川を有する、みどりの風薫る情緒、豊かな町です。

その中で西に位置する「岳（だけ）の棚田」は、国見山の標高 100m から 400m の高地にあり、平均勾配 1/5 という傾斜地に位置しており、地区内の水田はすべて棚田で、日本の棚田百選に認定され、平成 8 年には「第 2 回全国棚田サミット」の交流会会場になりました。

当地区での棚田の始まりは、江戸時代（1625 年頃）だといわれています。厳しい傾斜地を下の地区（切口、上山、下山）の二男や三男が食料確保のため開墾し、頑丈な石積みにより法面を固定しながら、何代にもわたって地区民が苦労を重ね、一枚、一枚開拓していった結果、現在では約 720 枚、約 32.6ha の棚田に広がっています。

棚田での農業は、水源の確保や、水路、石垣の維持（草取り）・補修などに多くの労力を要し、困難を伴ったが、地区民は溜池や水路、農道の共同管理などに協力し合うことで克服してきました。このような、長年にわたる農業を通じての助け合いは、この地区での共同体としての意識を高め、互いに協力し合うという精神、「結いの心」は地区の特性ともなっています。

棚田は、傾斜地のため作業効率のよい大型農業機械も導入できないほど農業生産条件が不利な地域です。さらに近年、減反政策や農業担い手の高齢化等の地域農業を取り巻く環境は厳しさを増している中で、先祖が苦労を重ね、「結いの心」で開拓し維持してきた棚田を多くの人たちに知ってもらおうと、平成 9 年に若手農業後継者による「岳信太郎棚田会」を結成し、棚田のできる米の過程や苦労を少しでも、体験してもらおうと、「棚田米オーナー制度」によるオーナーを募集し、消費者と農家の交流による、棚田米の PR をしてもらおうと活動を始めました。

最初は、棚田米の魅力にオーナーの参加があり、県連合会の主催での「棚田での体験による田植え」を開催し、佐賀市近郊の子供と親の 100 組に、田植えを体験してもらい、「山の上にも田植えが出来るんだ」、「水が冷たい」、「景色がきれい等」の声が聞かれました。次に地元開催の車イスマラソンに出場す



△「結いの心」を持ち、ふるさとを守りたい。

る韓国選手に、田植え機を操作して田植えを体験させたり、総合学習の時間を利用した地元中学生の体験学習（田植え・稲刈り・他）で地区の財産である棚田の意義の啓発活動や、九州大学の短期留学生をホームステイによる、農村文化を学ぼうと、「田植えや草刈り、稲刈り」を通して、国際交流を体験してきました。

そうした活動の中で、多くの人が現地に来てもらい、体験してもらった結果、棚田での農業作業の大変さや、棚田の持つ役割の大切さを知ってもらい、中山間地域等直接支払制度の確立した事は、地区民は大変うれしく思っています。

今後は、どこの地区でも棚田を利用したイベントや交流体験等の、開催が盛んになっていくと思われるが、彼岸花の咲く棚田での生產品の原点である「棚田米の販売」を少しずつでも増やしていく事を、頭に入れ【安全で安心した米／生産者の顔が見れる本物（ほんなもの）の米】の生産や販売アップに努力し、そのためには清らかな水で少ししか生産できない棚田米、農薬を少しでも減らし、地元の堆肥や米ぬかを利用した有機肥料米の栽培に力を入れ、「結いの心」を持った棚田米生産者として、地域活性化とふるさとの保存へとつなげていきたいと思ひます。

## [会員通信]

### 里山文化の中の棚田

茂木町農林課長 田村幸夫

最近ちょっとした棚田ブームになっているのか、私たちの町へも棚田を訪ねて来る人が多くなっている。

私たちのように中山間地域で暮らしている者にとって棚田は生活基盤の一部であり他者にはあまり足を踏み入れないでもらいたいと思っている。なぜならやってくる人のほとんどが棚田をさも理解しているという都会人のエゴが時々見え隠れするからで、本当に棚田のことを分かって訪れる人はホンの一握りしかいないからである。

私たちが先人から譲り受けたこの棚田は、一畝一畝掘り起こし、何百年もの長い年月、米を作り続けてきた。米を作ることからその地域独特の文化を育んできた。

米を作るには水が必要で、山あいの田んぼに水を貯めることは大変なことである。そのために山から滲み出す水のために山の手入れをし、落ち葉は発酵させて肥料にする。このミネラル分がたくさん含まれた肥料は土を肥やし微生物をはじめさまざまな生きものや植物の成長を促してきた。こんな自然界の循環が美味しい米を稔らせてくれる。そしてこの米が主食としてはもちろんだが、酒やみそなどに加工され、時には豊作祈願や豊作御礼のお祭りに一役を担い、米はムラの暮らし文化を創ってきたのである。

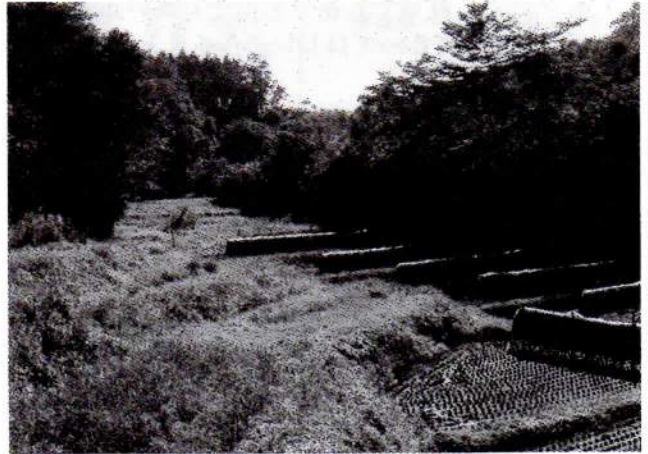
このようにして棚田をみると、単に棚田ではなく、里山も含めたその地域に全体の関わりがひとくくりに見えてくるではないか。これが里山文化でありこの文化圏の一部のロケーションが棚田であるわけで、その地域の文化を見つめ直すことが棚田をみることである。

現在このような地域は少子高齢化により米作りも容易ではない時代になっている。

米を作らなければ田んぼは荒れてまた昔の山に戻ってしまうかも知れない。だから棚田めぐりのようなことから一步踏み込み、その地域の里山文化をどうするのか、地域の人たちと一緒に里山の文化を守るんだという気概をもっていただきたい。荒れてしまう棚田で自分たちも米を作りその地域の人たちとしっかりつき合っていくことが里山文化を継承していくことではないかと思う。

このようなことが現実となれば棚田を訪れる人たちを歓迎し、地域の人との融合によ

り新しい棚田文化、つまり新しい里山文化を創っていく歴史の始まりとなるのであろう。



△秋の見学会で訪れた茂木町「石畑の棚田」

### 棚田学会「北関東の棚田」に参加して

山形県大蔵村 矢口 智

私がまだ小さい頃は、ようやく耕耘機が回ってきた（我が家のは、たしか武蔵と言ったような）程度で、その他のほとんどの仕事は人の力だった。見ていて気の遠くなるような女方の苗とりや男方の田植え、夏の田の草取り、秋の稲刈りなど、現代では忘れられてしまったような「根気」と「継続」という、人間の恐ろしい力のなせる技だったのだろうと思う。

今、平野部では大規模な区画整理事業が行われ、一枚1haの田が当たり前ようになってきていて、収益性と作業性の追求はとどまる所を知らないように進んでいる中、改めて山間の棚田の前に立ってみると、少し前までには思いもしなかった、地形をうまく利用した造形美やたくましさ、圧倒的な迫力で迫ってくるような気がする。先人達が苦勞して作り守ってきた一枚一枚の田んぼに、他では味わうことの出来ない何かを感じさせてくれる。

しかし、農業全般の未来が見えない今、この風景がはたしてそのまま残っていくのだろうか。そのことは誰でも考えていることなのかもしれないが、単純に今までどおり「棚田を保存」していくことには限界があるのではと思う。新たな気持ちで、新たな考えを持って取り組むことが必要なのではないだろうか。「保存」から「活用」へと発想を変えてみることで、特別な事を考えなくても少しずつ知恵を出し合って、少しの楽しみを見つけながら前に進んでいくことが大事だと思う。楽しみがあったら絶対にうまくいくと思う。グリーンでもエコでも何でもいから様々

な人に棚田へ足を運んでほしい。人との交流が必ず良い知恵を授けてくれると思う。米でもソバでも野菜でも花でも何でもいから、元気を出して作ってほしい。作ることで何かが生まれる。

東北の田舎に住んでいる私は、栃木から南は山も棚田もない平らな所だと思っていたのですが(ホント)、立派な山間地があって棚田があって、違うのは雪だけなんだなあと、

妙に感心してきました。「雪解けの土の中から作物が伸びる」のです、大蔵村では。

今回、烏山町や茂木町の棚田を見学して、何か新しい発想や楽しいことが湧いてくるような気がしています。役場や関係者の方から大変親切にさせていただいて、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。ありがとうございます。今度は山形の「四ヶ村の棚田」にもぜひ来てください。でっかいぞ。

## 【事務局ニュース】

### 棚田現地見学会・研究会のお知らせ

#### 中国雲南省元陽の棚田

概要(予定)

日程：5月9日(月)～14日(土) 5泊6日

費用：150,000円程度

内容：雲南省元陽の棚田見学  
ハニ族の地元料理を堪能  
民族舞踊の鑑賞  
民族工芸品等の市場見学  
少数民族の村を訪問、等々

#### 宇佐八幡宮の荘園―田染荘―

～大分県豊後高田市小崎地区～

概要(予定)

日程：6月18日(土)～19日(日) 1泊2日

費用：15,000円程度(宿泊(懇親会・朝食含む))

内容：豊後高田市小崎地区の見学・研究会  
宇佐八幡神宮、富貴寺大堂、屋山長安寺、天念寺、夷岩屋、旧千灯寺等見学

#### 新潟中越大地震復興応援コンサート

### 心の橋をかけよう

1500名様ご招待

(お申込方法は案内チラシをご覧ください)

日時：3月6日(日) 開場 13:30 開演 14:00

会場：長岡市立劇場(新潟県長岡市)

主催：新潟中越大地震災

復興応援コンサート実行委員会

後援：長岡市、長岡市教育委員会、小千谷市、小千谷市教育委員会、山古志村、山古志村教育委員会、長岡商工会議所、棚田学会、全国棚田(千枚田)連絡協議会、NPO法人棚田ネットワーク

出演：ふるさときゃらばんと地元の小学生達

#### バイオマス・廃棄物利用シンポジウム

100年先からみてみよう

バイオマス・廃棄物利用

### 新たな仕組みと将来

(詳しくは、別紙案内チラシをご覧ください)

日程：3月24日(木)

会場：科学技術館サイエンスホール

主催：COE『新エネルギー・物質代謝と

「生存科学」の構築』

後援：経済産業省、国土交通省、総務省、農林水産省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、住友重機械工業(株)、積水化学工業(株)、月島機械(株)、電源開発(株)、日本ガイシ(株)、フジサンケイビジネスアイ、環境新聞(交渉中含む)

協賛：エネルギー・資源学会、科学技術戦略推進機構、化学工学会、環境科学会、棚田学会他(交渉中含む)

#### 編集後記

昨年は日本列島各地が、相次ぐ台風や大震災に見舞われた年でした。復興出来ずに、仮設住宅で新年を迎えた方も多く、地震で村中の山の形や川の流れまでもが変わってしまった地域、全村避難を余儀なくされた地域では、春の雪解けまで手も足も出ない状況の中、不安な毎日をおくっていらっしやることと思います。せめて、本通信の紙面で、お互いの地域の状況を発信し合い、理解し合い、心の絆を強めていこうではありませんか！

棚田学会事務局 高橋